

今回の一般質問では、「0歳からの家庭教育」が、翌日の茨城新聞一面のトップ記事になりました。支援頂いている方から「一面、見たよ」とのご連絡も頂き、大変うれしく思っています。その一方で、来年度前半に完成となるこの「家庭教育支援資料」がどのようなものになるのか、非常に気になるところです。

県が行っている施策は多々ありますが、いつも私が気になるのは、きちんと頭で考え、知恵が絞られているかどうかということです。現場で起きている現象をしっかりと見つめ、人の話をきちんと聞いて、本当に必要なものは何なのか、考え抜いて実行されているかどうかということです。そうでなければ、「色々な冊子がありますが、どれも活用されていません」「色々なキャンペーンをやりましたが、どれも効果がありません」という結果になってしまいます。

現に、今行われている「反射材ファッションショー」（前頁参照）も写真を見る限りでは、もう一工夫が必要でしょう。これまで県警と県交通安全協会は、反射材を無料配布し、着用を呼びかける街頭キャンペーンを行ってきました。しかし、「無料で配布した物は、なかなか着けてもらえない」との主権者側の声が新聞に掲載されていました。着用方法をどんなに提案しても、その着用方法自体に問題があれば、着用率の向上にはつながりません。

少し以前の話になりますが、2011年11月16日の日本経済新聞にスウェーデン製のある反射材が人気という記事が載っていました。動物や星、ハート等の形をした約200種類のキーホルダー。バッグに着けてもかわいらしく、店頭で選ぶ楽しさもあるようです。（左下参照）

行政の方々には、生活者、住民の気持ちを汲んだ有効性の高い企画を考えて頂きたいと切に要望します。もちろん私も、アイデアを練り、どんどんぶつけていきたいと思っています。

▼反射材の普及率が高いスウェーデン製の反射材  
スウェーデンでは、人口の約2割が歩行者用の反射材を身につけているとされています。



前号でお伝えしました〈一般質問特集号前編〉は、ご希望の方にお届けいたします。お気軽にご連絡ください！



## 県政報告会を開催します！

県政報告会も、おかげさまで5回目を迎えることになりました！

今回は、私の前職の株式会社読売広告社から、まちづくりのコミュニケーションの専門家・都市生活研究所所長の榎本元（はじめ）さんをお迎えします。

### 「まちを元気にする新発想（仮）」

について、じっくりお話を伺いたいと思います。

まちづくりの本当のあり方を、この機会に考えてみましょう！

【榎本元氏プロフィール】1961年愛知県生まれ。広島大学卒業。現在、株式会社読売広告社 都市生活研究所所長。  
・20年以上にわたり、不動産、都市開発、住宅開発等のコミュニケーション・コンサルティング業務を担当。  
・「東京ツインパークス」「品川タワー」をはじめとした都心タワー物件や大規模物件の商品コンセプト、商品企画、販売広告戦略に携わる一方、「ゲートシティ大崎」「オルトコハマ」など、まちづくりの開発コンセプト構築等のソフトコンサルティング業務に携わる。



（発行）大谷明と茨城の未来をつくる会

〒312-0043 ひたちなか市共栄町9-12-101  
TEL&FAX 029-219-7470

<http://www.ohtani-akira.jp>

大谷明

検索

# 大谷明 NEWS



10号

2013年  
9-10月



一	般	質	問
	特	集	号
		後	編



虫の音の美しい季節となりましたが、いかがお過ごしでしょうか。おかげさまで大谷明NEWSも10号を迎えることができました。「毎回、楽しみにしてるよ」という声も頂き、皆様に支えられ、ここまで来ることができました。今回も前号に続き、6月に行った一般質問の内容をお伝えします。今回の質問は、新聞一面で取り上げられ、大きな注目を集めました。ぜひ最後までお付き合いください。 茨城県議会議員 大谷明

### Question No.4

## 0歳からの家庭教育



虐待やひきこもり、いじめなど、親子の関係や子どもを取り巻く問題の話題が後を絶ちません。こうした問題の根本は、人と人のかかわり方の問題と言ってもよいかもしれません。

人と人のかかわり方や信頼関係の土台は、0歳から3歳までの

乳幼児期に育まれます。

アメリカの精神分析学者エリクソンは、乳幼児期の育児上大切なテーマは、人を信頼することができるように育てることであり、人を信頼する感性や感覚は、乳幼児期に最も豊かに育つとも言っています。

しかしながら、言葉を話すことができない乳幼児へは、理解の欠如や大人の思考からくる様々な誤解が多くあります。こうしたコミュニケーションロスが、その後の親子間の問題や社会への不適合などの問題につながっている場合が多いのです。

乳幼児への理解の欠如や誤解は様々ありますが、例えば、「赤ちゃんが望んでいることはどんなことでも無条件で満たしてあげたほうがいいのか、そうしないほうがいいのか」。私も、現在、1歳の娘がおりますが、泣いて抱っこをせがむ子どもを前にして、何でも思いどおりにすると信頼心が強くなるよとか、甘やかしたらよくないよと言われた経験があります。

この件に関しては、児童精神科医の佐々木正美先生が、著書「子どもへのまなざし」の中で、ヨーロッパの研究者の間での論争から、乳児院で実験的な育児をした結果を紹介しています。結論から言いますと、満たされるということを経験し続けた赤ちゃんは、自分を取り巻く周囲の人や世界に対する信頼と自分に対する基本的な自信の感情が育まれてくるのがわかっています。

これは一例ですが、こうしたことを知っているか、知らないかで、子どもに対する接し方が大きく変わるものと思われれます。また、知っていれば、子どもとはこういうものという心の余裕が生まれ、必要以上に心配することやイライ



▼県がこれまで作ってきた「家庭教育ブック」

3～5歳の子を持つ保護者向け



就学前～小学校4年生の子を持つ保護者向け



小学校4～6年生の子を持つ保護者向け



ラすることもなくなるでしょう。

本県では、家庭教育ブック「ひよこ」という冊子が配られています。対象は3歳から5歳の幼児家庭であり、0歳から乳幼児家庭を対象にするものではありません(前頁参照)。また、子育て支援としての情報提供では、離乳食のつくり方や予防接種の案内などの機能面の情報提供が主流です。

こうしたことも大切ですが、あわせて、乳幼児の心理面や精神構造から導き出される親の子に対する向き合い方についての情報提供や教育の機会が重要と考えます。特に、核家族化の中、親と子どもだけで過ごしている孤獨の孤という字を当てた「孤」育て親子がふえています。こうした家庭にいかにか情報を届けるか、そして、気持ちを楽にして外に情報を求めているようになるかが課題です。それには、教育庁だけではなく、子どもの健診等でこの時期の親にアプローチできる機会を持っている保健福祉部との連携も必要になると思います。乳幼児に対する親の向き合い方についての情報や教育の機会を提供していくべきと考えますが、保健福祉部との連携も踏まえて、教育長の御所見をお伺いいたします。



0歳から3歳までの子どもへのかかわり方は、子どもの人間形成上、とても大切であると私も感じております。

特に、最近では、いじめ問題などが発生する中で、改めて人間としての優しさや規範意識の大切さなどが問われており、親の子に対する向き合い方に関する情報の提供など、乳幼児期の保護者に対する支援をこれまで以上に進めていく必要があるものと認識しております。

こうしたことから、新たに、0歳から3歳までの子を持つ保護者向けの家庭教育支援資料を作成することにしました。家庭の教育力推進委員会を開催し、資料の具体的な内容や効果的な活用方法などについて検討を開始し、「たくさん情報を入れるのではなく、ポイントを絞って作成し、できる限り使ってもらう資料とすることが大切」などといった多くの有益な意見も寄せられています。

作成に当たりましては、議員御指摘のように、乳幼児の心理面や精神構造からアプローチする視点にも十分留意してまいります。

昨年、第一子となるわが子が誕生し、子育ての大変さを当事者として感じるようになりました。そんな中、妻が産院から紹介されて読んだ一冊の本が、心の支えやよりどころになったという話を聞きました。私たちと同じく、初めての子育てに向き合う親御さんの一助になればという思いで、質問を練らせて頂きました。

今回、0歳からの家庭教育本ができることを早速ご報告したら、こんなご意見を頂戴しました。「概念的・理論的な話も大切ですが、『こういう時、じゃあ具体的にどうすればいいの?』というお母さんの声に答えられる冊子になってほしい」と。答弁では、「たくさん情報を入れるのではなく、ポイントを絞って」とありましたが、具体的な解決策が一つでも多く指示するような点も考慮すべきだと私も思います。

子どもの気持ちを満たすというのは、簡単そうでとても難しいものです。まだ0歳の娘が手にしたものが危ないものだったとき、強引に手から放そうとするのではなく、代替品をあげるようにするとよいということも、先輩のママさんから教わりました。子どもの気持ちに寄り添うために必要な知恵というのでしょうか、そういった点も一緒に伝えてもらえるとうれしいなあと思います。

## 薄暮時の交通安全対策



本県の人身交通事故発生件数・死者数は、連続12年減少しておりますが、全国的に死者数はワースト11位であり、犠牲者をさらに減らしていくことが大切です。

本県の傾向は、高齢者の被害が非常に多く、16時から20時の薄暮時間帯の事故発生件数が全体の約30%を占めています。また、死亡事故だけで見ると、全体の約43%がこの時間帯に発生しています。薄暮時の交通事故を減らす取り組みをもう一步踏み込んで行うことが効果的です。

そのためには、歩行者、自転車に、反射材を身につけてもらうことが有効です。しかし、うっかり忘れてしまつとか、ファッション的に抵抗があるといった声も聞かれます。そこで、もっと自然に身につけてもらえる方法がないか、私なりに考えてみました。

例えば、服飾メーカーと県警がタイアップして、反射材を使った商品開発と一緒にを行うというのはどうでしょう。ちなみに、日本ヴォーグ社とJAFが共同制作した反射材入りの毛糸を使った編み物キットが発売されています(右参照)。デザイン性が高ければ、身につけてもらえるのではないのでしょうか。メディアに取り上げてもらうPR効果も期待でき、反射材を知ってもらうよい機会にもなります。薄暮時の交通事故削減のための一步踏み込んだ施策や工夫について、警察本部長のアイデアを伺いたいと思います。



▲反射材入りの編み物(帽子・マフラー・ハンドウォーマー)



本県の交通死亡事故は薄暮時から夜間にかけて最も多く発生しており、特に、薄暮時の死亡事故の犠牲者はすべて高齢者で、その約半数が歩行中に事故に遭ったものです。

このような類型の事故は、反射材の着用で防止できる可能性が高く、従前から反射材の着用を呼びかけてまいりましたが、残念ながら、被害者の多くが反射材を着用していないという実態がございます。したがって、議員御指摘のとおり、一步踏み込んだ施策や工夫が必要と考えております。

本年度から3カ年事業として、運転免許を持たない高齢者を対象にセミナーを実施し、反射材の効果や着用方法について、具体的にわかりやすく指導をしているところでございます。

また、抵抗感なく反射材を身につけていただくため、昨年からは、高齢者御自身が反射材つきの帽子や手袋、傘等を着用して、ファッションショー風にステージ上を歩いていただき、他の参加者に光が反射する状況を実感していただく等、取り組みをしているところでございます。

さらに、服飾専門学校や高齢者クラブ等に協力を求め、反射材を取り入れた衣料品等の制作を依頼し、作品コンクールとかファッションショーなどを開けないか検討しているところです。商品化となると得意な分野ではありませんので、直ちに申し上げられませんが、そういったことも念頭に、服飾専門学校の若い人のアイデアを借りるといったようなことは、鋭意進めてまいりたいと思います。



▲常総市で行われた「反射材ファッションショー」

昨年、所属していた文教警察委員会の中から、ずっと問題意識として持っていたことを今回再度質問することになりました。何度も何度も質問し続けることで、動いて頂けることもあります。本気で真剣に取り組んでもらいたいという私の思いのこもった質問です。